

追悼 晝馬輝夫 さん

晝馬輝夫氏を悼む

家 正則

平成30年3月29日、浜松ホトニクス会長晝馬輝夫氏をご逝去されました。晝馬輝夫氏は1926年生まれ、享年91歳でした。1953年に浜松ホトニクス社の前身となる浜松テレビ社を創業し、光電子増倍管のシェアで世界の90%を占める有名企業に育て上げられました。カミオカンデの大型光電子増倍管開発で、小柴先生や梶田先生のニュートリノ研究によるノーベル賞を支えた話は有名です。

筆者も天文用CCD開発について1980年代中頃に同社に相談に行ったのを皮切りに、すばる望遠鏡計画の構想時代からいろいろお世話になりました。毎年文化の日で開催される浜松コンファレンスには二度呼びいただき、望遠鏡計画や遠宇宙の観測についてお話させていただきました。1991年の第8回講演録を読み返してみると、筆者の前座話を引き取って、晝馬さんがテレビ開発の祖たる高柳健次郎先生の話から、宇宙線研や天文台の宇宙観測へのかかわり、生命の起源と脳の働き、さらには当時同社が開発したポジトロンCTの話まで、聴衆を魅了する洒落な話術で講演されたことが鮮明に思い出されます。2007年の講演会のあと、レーザーガイド星補償光学の話になったとき、「パワーを上げて光路中の水蒸気を全部飛ばしてしまえば、クリアに見えるのではないか」など大胆なアイデアを披露されたこと、また「天文学者は民生用の製品には必要のないとんでもない技術目標を要求する。無茶な話だと想いつつ技術者が一丸となって頑張り実現すると、当初は考えもしなかったような応用が生まれるもの



だ」という話をされていたことも思い出します。

スケールの大きい発想をされる晝馬さんは、2004年に光産業創成大学院大学を設立され、同大学で学ぶ院生には、光を軸にした開発研究成果をベンチャービジネスとして開花させることを推奨し、起業のノウハウまで支援されてきました。

6月20日に「お別れの会」が浜松市で開催され、晝馬さんのエピソードを綴ったビデオ上映につづき、有馬朗人、小柴昌俊、梶田隆章各氏による晝馬さんを悼むスピーチがあり、多くの方が献花されました。

ハワイ観測所すばる望遠鏡の超広視野カメラHSCに搭載された背面照射型高感度CCD素子の開発を支援していただき、天文学振興財団理事を努めていただくなど、天文学界もたいへんお世話になりました。心よりご冥福をお祈りいたします。